

スキー・スノーボード実習報告(2)

—平成11年度～平成21年度—

塚田修三*1・内山了治*1・児玉英樹*2・鈴木智之*1

An Examination of the skiing and snowboarding school from 1999 to 2009

TSUKADA Syuzo, UCHIYAMA Ryoji, KODAMA Hideki and SUZUKI Tomoyuki

キーワード：冬季スポーツ，スキー，スノーボード，アンケート調査

1. はじめに

本校のスキー実習は昭和38年本校開校以来継続している学校行事であり、平成(以下、Hとする)13年度にスノーボードを取り入れ、H14年度に名称をスキー・スノーボード実習に変更し継続している。実習の目的はスキーとスノーボード(以下、ボードと略す)技術の習得・向上、団体生活における規律面の向上、そして教員と学生及び学生相互の親睦を深めることにある。本校の立地条件と雪深い北信濃の自然を生かした実習でもある。

前報¹⁾(第33号1999年)では、この実習に関する当初からの概要²⁾と、H5年度からH10年度までの5回(H9年度は第18回オリンピック冬季競技大会長野1998のため中止)の実習内容と、学生に対するアンケート調査結果をもとにスキー実習全般について報告した。その後、H21年度までの11年間には、実施学年、日程、場所等の基本的な実施形態は維持しながら、ボード実習の導入(H13年度)、実習日程の工夫、指導員の増員、更にはレンタル関係の充実など、学生のニーズにも応えた改善を行ってきた。これらの結果、実習後のアンケートでは、この実習の意義について「大いにあった」「あった」と回答する学生は各年度90%を超えている。また、H17年度とH21年度に教務委員会が5年生を対象に実施した「学校行事満足度調査」においては、スキー・ボード実習に関して「大いに満足した」、「満足した」と回答した学生は両年度ともに8割を超える高率を示した。これらのことから本実習は、意義のある冬季行事として定着してきたと捉えることができる。

本報では、H11年度からH21年度までのスキー・ボ

ード実習の概要について実習後の学生へのアンケート調査を含め報告する。

2. 実施状況について

2-1 実施状況の概要

実施状況の概要は表1のとおりである。学生の出席状況については、季節性インフルエンザの影響を受けたH15、H17年度に当日欠席者及び途中で帰宅する学生が多かった。H21年度は計画段階で新型インフルエンザの影響が心配されたが、無事終了することができた。実習種目としてH13年度にボードを追加した。ボードは学生にとって「挑戦」したい種目であり、H19年度以外は各年度ともスキー選択者を上回っている。H19年度の選択者数の逆転は、体育教員と担任が、それまでの傾向から、運動が余り得意で無い学生はスキーを選択した方が事故や故障が少ないことを説明したことにより、スキー選択者が多くなったものと推察される。実習態度は毎回良好で、黒姫スキー学校の指導員からも高く評価されている。

2-2 年度ごとの特記事項

実習を実施するにあたり、変更、改善した内容および特記事項は次のとおりである。

- 1) H11年度
 - ・宿泊代が200円値上がりし6,200円となる。
 - ・宿舎に対し、レンタル用具(古い)、食事(冷たい)等に関する改善を要望した。
 - ・開講式に浅黄屋校長が出席され、終日視察された。
- 2) H12年度
 - ・実習班の編成を行うために、滑走テストを開講式直後に実施した。学生の希望を基に大きなグループを作り、このグループ毎に滑走テストを実施し、指導員がグルーピングした。これにより各班の技能レベルがある程度まとまり、実習の効率が高まった。

*1 一般科教授

*2 一般科准教授

原稿受付 2010年 5月20日

表1 実施の概要

年度	実施期間 水～金 ¹⁾	参加 予定 (名)	当日 欠席 (名)	実参 加者 (名)	引率 者数 (名)	実習班数		人数(名)		指導員 ²⁾ (名)	備考
						スキー	ボード	スキー	ボード		
H11	1/19～21	203	1	202	7	17	0	202	0	17(1)	
H12	1/17～19	200	2	198	9	18	0	198	0	18(2)	
H13	1/23～25	200	2	198	9	7	10	83	115	17(1)	スノーボード導入
H14	1/22～24	201	3	198	7	7	10	83	115	18(2)	
H15	1/21～23	199	4	195	6	8	10	93	102	18(2)	1日目夜から参加1名
H16	1/26～28	204	1	203	9	7	10	86	116	17(1)	実習不参加1名
H17	1/25～27	203	5	198	8	7	11	72	126	18	実技指導は全て ス 学校指導員
H18	1/24～26	206	2	204	8	5	13	62	142	18	
H19	1/23～25	208	2	206	8	9	9	115	91	18	
H20	1/21～23	207	2	205	8	7	11	84	120	18	実習不参加1名
H21	1/20～22	203	5	198	9	7	11	84	114	18	

1)：実施曜日は各年度水曜日から金曜日である。

2)：()内指導員数は本校教員で内数である。

・1日目の実習終了時点呼を班毎とし、点呼後班毎に解散することとした。

・開講式に宮下重敬教務主事が出席された。

3) H13年度

・学生の要望に応え、ボード基礎技術を的確に身につけるねらいからボードを導入し、スキー、ボードのどちらかを選択することとした。

・ボード選択者に転倒による捻挫、打撲の受傷者が多く見られた。

・レンタル用具は、これまでスキー・ボードセットとウェア上下のみであったが、帽子、手袋、ゴーグルの小物セットを追加した。

・開講式に藤原勝幸学生主事が出席された。

4) H14年度

・実習名をこれまでの「スキー実習」から「スキー・スノーボード実習」に変更した。

・リフト代3日券8,000円(800円値下がり)となる。

・開講式に堀内征治教務主事が出席された。

5) H15年度

・学生課教務係担当者の引率が廃止された。

・実習実施前からのインフルエンザ流行の影響で、帰宅者、病院受診者が例年に比べ多かった。

6) H16年度

・リフト代3日券は7,200円(800円値下がり)となる。

7) H17年度

・本校体育教員の実習班指導担当を無くし、スキー学校指導員を2名増員し18名とした。

・リフト代3日券は7,000円(200円値下がり)となる。

8) H18年度

・ゲレンデの積雪が少なく、滑走バーン硬いためボード選択者の転倒による打撲、捻挫が多くみられた。

9) H19年度

・事前に技術解説書(1冊200円)を配布し、活用した。理論的な理解が深まり成果が上がった。

10) H20年度

・体調不良者は少なかったが、打撲が多くテーピングとシップ薬が不足した。

・青木正克事務部長が2日目に視察された。

11) H21年度

・世界的な新型インフルエンザの流行により、11月に1学年から「実習中止」の要請があり、実施の可否について一般科及び校内で議論された。

・実習時の体調不良者に対し、感染拡大を回避するため帰宅(4名)させ、例年実施していた全体ミーティングを中止した。

・宿泊代(1泊3食)が300円、昼食代が100円値上がりし、宿泊代6,500円、昼食代800円となる。

・2日目に岸佐年副校長、青木正克事務部長が悪天候の中視察された。

2-3 引率者(敬称略)

1) H11年度 7名：(担任)前田善文、曾田友紀子、内山了治、児玉英樹、宮坂忠昭、(副担)小林茂樹、(体育)塚田修三

2) H12年度 9名：(担任)倉島史憲、小林茂樹、藤沢太郎、吉野康子、戸谷精三、(副担)小池博明、(体育)塚田修三、内山了治、児玉英樹

3) H13年度 9名：(担任)山口博己、富永和元、金井辰郎、小池博明、堀内泰輔、(体育)塚田修三、内山了治、児玉英樹、(教務)山田進之

4) H14年度 7名：(担任)塚田修三、中澤克昭、内山了治(林本代理)、板屋智之、久保田和男、(体育)児玉英樹、(教務、通い)山田進之

5) H15年度 6名：(担任)中村護光、児玉英樹、内山了治、大西浩次、小澤志朗、(体育)塚田修三

- 6) H16年度 9名：(担任)山口博己, 吉野康子, 小林茂樹, 濱口直樹, 曾田友紀子, (副担)奥村紀浩, (体育)塚田修三, 内山了治, 児玉英樹
- 7) H17年度 8名：(担任)中村博雄, 小池博明, 藤沢太郎, 金井辰郎, 堀内泰輔, (副担)高桑潤, (体育)塚田修三, 児玉英樹, (内山：内地研究)
- 8) H18年度 8名：(担任)塚田修三, 高桑潤, 林本厚志, 久保田和男, 戸谷精三, (副担)奥村信彦, (体育)内山了治, 児玉英樹
- 9) H19年度 8名：(担任)前田善文, 奥村紀浩, 中澤克昭, 板屋智之, 内山了治, (副担)大西浩次, (体育)塚田修三, 児玉英樹
- 10) H20年度 8名：(担任)小澤志朗, 大西浩次, 児玉英樹, 小林茂樹, 奥村信彦, (副担)濱口直樹, (体育)塚田修三, 内山了治
- 11) H21年度 9名：(担任)山口博己, 富永和元, 小池博明, 濱口直樹, 堀内泰輔, (副担)水口学, (体育)塚田修三, 内山了治, 児玉英樹

2-4 ボードとスキー選択者の割合について

H13年度から実施したボードの選択状況について、図1にそれぞれの選択者数と初めて体験する者の割合を示した。ボードは時代の流れとH12年度までの学生の要望により前述した趣旨で導入を決定した。従って、H13年度の学生がどのような選択をするのか未知数であったが、58%の学生がボードを選択しそのうちの70%、80名がボードに初挑戦した。以後、参加学生に対するボードの割合はH15年度に46%に落ち込むが、その後3年間は増加しH18年度は72%まで増加した。H18年度は積雪が少なく滑走バーンも硬いためか、怪我をする学生が例年以上に多かった。このためH19年度は、学生希望調査に際して、安全対策、実習班の編成上各班の

人数にばらつきが大きくなる(初めてボードやスキーに取り組む班は人数を少なくしている)こと、および実習の成果を高めることなどを勘案し「運動が余り得意で無い者は、スキーを選択した方が無難であること」を体育教員と担任から指導した。その結果、スキー選択者がボード選択者を上回った。H20とH21年度のボード選択者は、H13～H15年度とほぼ同じ60%前後となっている。

2-5 安全指導とその対策、病気・怪我の状況

ボードを初めて体験する学生が多いことから、スキー、ボードともに安全対策と技術体系に関するテキストの用意、事故事例の提示と注意喚起、実習のVTR映像などを準備し説明している。学年から要請がある場合は、合同HRでスライド等を用いて極力具体的に、実習面、生活面の双方について説明し、例年多い問題点等を事前に指導している。

病院で診察を受けなければならないような病気と怪我の状況については、表2にまとめたとおりである。H11年度に入院した学生の状況は、実習2日目午前中、スキー滑走中に転倒し頭部を打撲し鼻血を出す。特に問題なく午後も実習を継続した。夕食も済ませ元気よく動いていたが、入浴後「頭痛」があり冷やしても痛みが引かないため、庁用車で地元の病院へ運んだ。そこではCT撮影ができないため、長野市の脳外科へ救急車で転院し検査を受ける。異常はないが頭部打撲のため「経過入院」の処置がとられ、翌日MRI検査となった。担任から保護者へも連絡しその検査に立ち会うことになった。結果は異常なく、検査後(実習終了日)、そのまま登校しクラブ活動に参加し翌日の大会に備えていた。幸い大事に至らず、担任が長野市の脳外科まで夜間に付き添うなど大変なご苦労をされた。

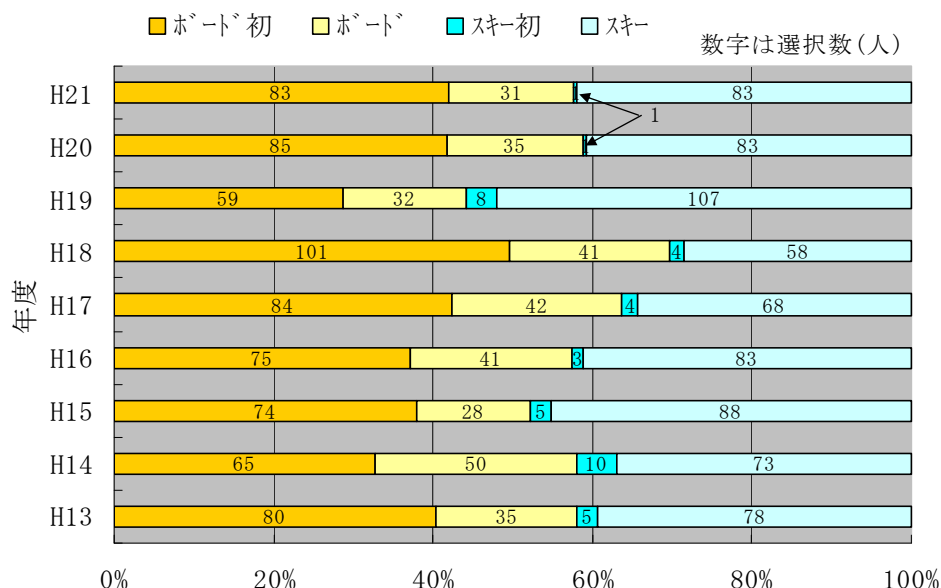


図1 スキーとボード選択者及び初心者の割合 (%)

その他の病気・怪我については、この11年間に体調不良やインフルエンザ等で帰宅した学生が18名、ボード選択者で骨折した学生が4名となった。ボード滑走中の骨折や打撲は、積雪が少なく滑走バーンが硬く引き締まっている状況の時に多く発生した。降雪量が多く天候が雪の場合はほとんど発生しておらず、これらの怪我は滑走バーンの状態に左右される傾向が見受けられた。体調不良者は、体調を崩したまま実習に参加し、悪天候と重なりさらに悪化させているケースがほとんどであった。これらの事故の発生状況や体調管理については、事前学習の折に学生に説明している。今後もさらに様々な情報を収集し、より安全で事故、怪我、病気等がない実習となるよう努力したい。

2-6 経費について

スキー実習に要する経費は、宿泊、バス、指導員、リフト券、保険、スキー・ウェアのレンタルである。

表2 病気・怪我の状況

年度	天候	病気・怪我
H11	①晴②晴 ③雪	病院受診4(風邪, インフルエンザ, 頭部打撲), 脳外科受診・入院1
H12	①曇②雪 ③雪	病院受診1(接触事故による裂傷)
H13	①②小雪 ③曇後晴	病院受診2(手首骨折1, 頭部打撲1)
H14	①晴後曇 ②雪③雪	病院受診(体調不良, 帰宅者1)
H15	①晴②晴 後曇③雪	病院受診+帰宅者4(風邪, インフルエンザ: 実習前からの流行)
H16	①雪②晴 ③晴	帰宅者1(体調不良)
H17	①晴②晴 ③曇	帰宅者4(発熱, 体調不良) 手首骨折1(帰宅後受診)
H18	①晴②晴 ③晴	手首骨折1, ボード転倒者に打撲・捻挫若干多い
H19	①②吹雪 ③小雪	帰宅者2(体調不良)内1名2日目に戻る
H20	①晴②曇 ③曇後晴	病院受診(手首骨折1: 帰宅), 帰宅者2(発熱2)
H21	①晴②雨 後雪③晴	病院受診1(発熱: 帰宅), 帰宅者4(発熱3, 腰痛1)

・①～③の数字は実習日

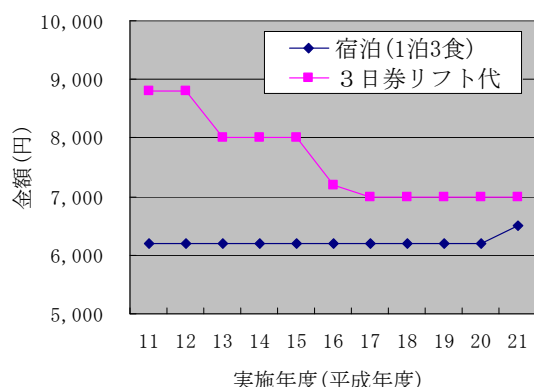


図2 宿泊・リフト料金の推移

これらの経費のうち、宿泊、リフト券、傷害保険および指導員費の一部は研修旅行積立金から支出し、バス代、指導員費の一部は国費と後援会費でまかなわれている。用具のレンタル料は、担任が事前に集金していたが、H17年度から業務軽減のため、実習当日ホテルで学生が個々に支払っている。

1泊3食の宿泊費と3日券のリフト料金の年次変化は図2に示した。H21年度は宿泊費が初めて値上がりして6500円、リフト券代は7000円であった。リフト3日券の料金はH11年度に比べ1800円値下がり、レンタル料はH7年度以降変わらないため、学生の負担に大幅な変動はみられない。H21年度のレンタル料を除く学生一人当たりの負担額は24,289円であった。宿泊費は1泊3食付きの料金であり、昼食も含め特別に大盛りサービス等も受けている。最近は「部屋が狭い」「食事の用意や片付けを学生に強いるのはいかがなものか」等の意見が担任と学生から寄せられるが、本実習は、脱いだ履物をそろえる、あるいは使った寝具をたたんで片づけるなど、学校・社会生活で必要とされる能力や態度を身につける機会でもある。また、利用しているホテルはゲレンデに近く、他団体は入らず、学生がホテル外へ出歩く状況もないなど実習には好条件であると言える。むしろ、恵まれた中で育った最近の学生の様子からは、旧黒姫山荘のような一人1畳以下の布団のみのスペースで、食事の準備や片付けも自ら行うなど、実習全てが「トレーニング」となる環境を与える事も必要ではないかと思われる。

3. 学生のアンケート結果

課題や反省点を生かすため、実習終了後にアンケート調査を継続しており、その一部を報告する。

3-1 実習への参加姿勢について(図3)

実習への参加姿勢はこの11年間各年度とも80%以上の学生が「大変意欲的」「意欲的」と回答している。中でも、これらの回答はボード選択者が高く、H13, 14, 17年度は98%, その他の年も90%を超えており、新しいことへの挑戦などこの実習への期待度と意欲は高いと言える。一方、「全く意欲がない」との回答は各年度10名以下であり、「どちらともいえない」と回答した学生は、H19, 20年度に多くそれぞれ15, 12名であった。このことは、前述したように事故や怪我を予防するために、体育教員と担任がスキーを勧めた事による影響があったものと推察される。

3-2 技能の向上について(図4)

技能の向上については、ボード選択者のほとんど(H15年度のみ94%でそれ以外は97%以上)が「向上」を実感している。ボードの特性として上達早いことがあげられるが、初日にボード上にやっと立てた者が、

最終日はある程度のバーンを滑り降りる事ができるようになるなど、練習効果を直ちに確認できる楽しいスポーツである。スキーについては、H20、21年度はスキー選択者の1割近くが「どちらとも言えない」と回

答していた。これらの回答の多くはスキー上級者であり、実習班内の技能差が拡大し、自らの技能と講習レベルが一致しないケースの増加が一因であると思われる。ボード選択者が増加し、ボード初級班の班員数を

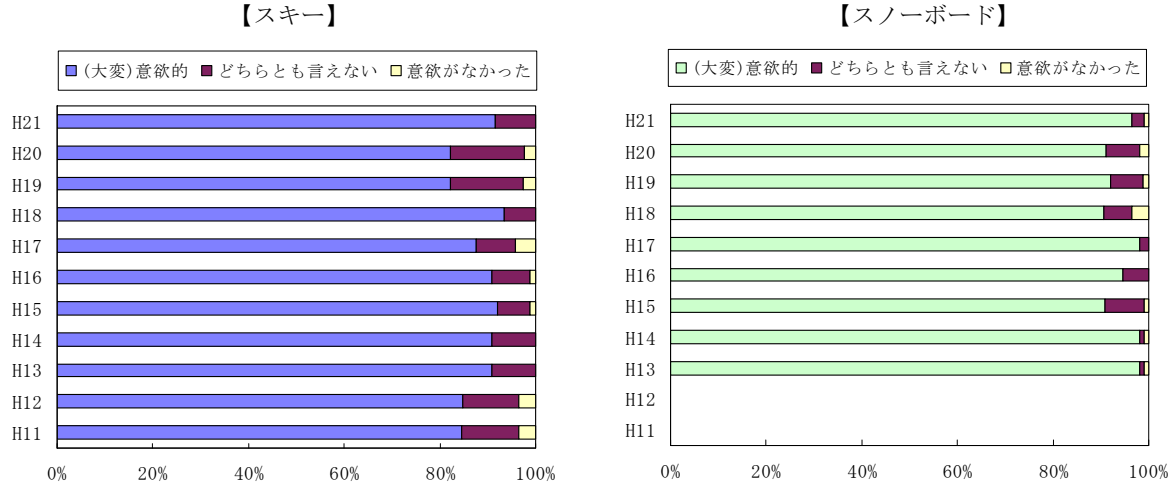


図3 実習への参加姿勢について

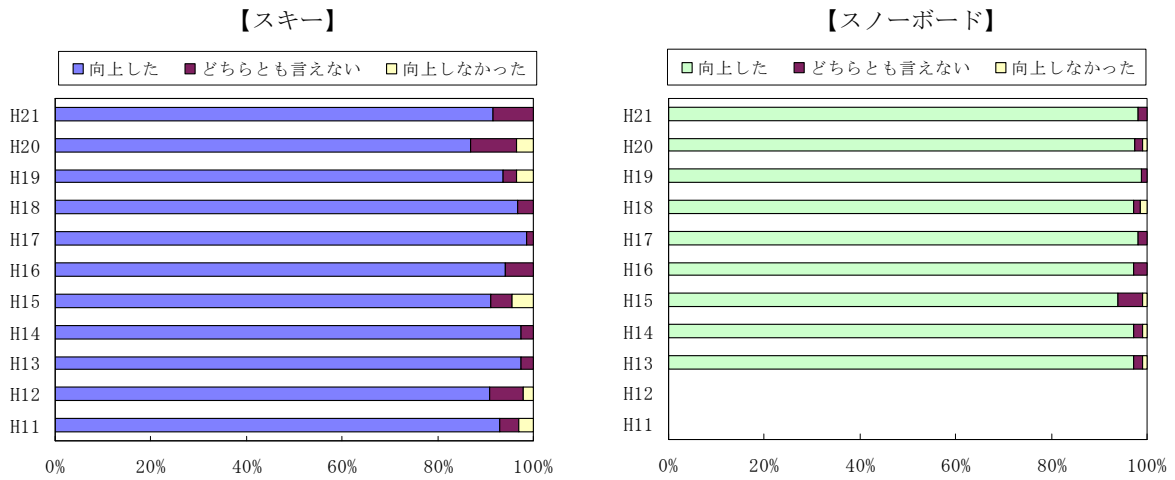


図4 技能の向上について

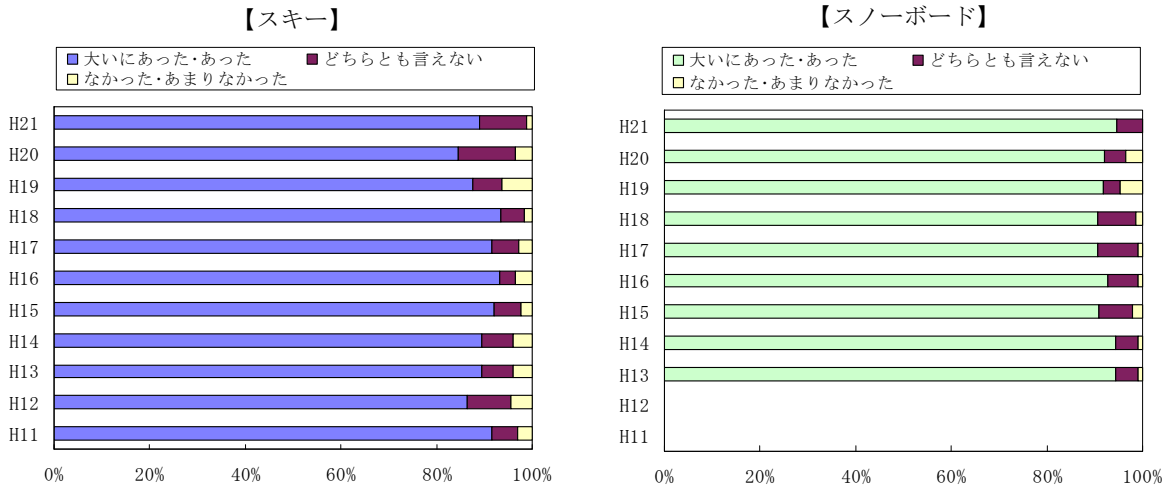


図5 実習の意義について

少なくすると、そのしわ寄せがスキー上級班の班員数増加となってしまふ。全体を18班編成に抑えているためこのようなケースが生ずるが、講習の成果を高めるために、選択者数と技能レベルに応じて、弾力的に班数および班員数を決められる体制が望まれる。

3-3 実習の意義について(図5)

スキー・スノーボード実習の総合評価として実習の意義について各年度回答を求めている。「意義が大いにあった」「意義があった」との回答は、ボート選択者では各年度90%以上を占め、スキー選択者ではH20年度に85%に低下するものの、その他の年度は90%かそれを超えている。スキー選択者は技能の向上と同様な傾向を示している。これらの結果から、実習としての所期の目的は達成されていると判断できる。

4. 本実習の見直しと課題

H11年度からH21年度までのスキー・スノーボード実習については、実習後に学生アンケートを集計し、担当学年と協議し(H21年度を除く)課題や改善点を明らかにしてきた。学生の総合評価も高く、引率教員も回数を重ね業務も効率化されてきた。同時に、H17年度とH21年度に教務委員会が本科5年生を対象として実施した学校行事満足度調査において、80%以上の学生が「大いに満足した」「満足した」との回答からも、本実習の意義を見出すことができる。また、本校の第2期中期目標・計画書(H21年度～H25年度)では、「地域の特性を生かし、1年生でスキー・スノーボード実習、2・3年生でスケート実習を実施する」³⁾ことが明記され、本実習は本校の教育方針・学習教育目標を達成する手段の一つとして位置づけられていると言える。

しかしながら、上記教務委員会調査結果⁴⁾のコメントとして「学生心理として、普段の授業と違う行事の満足度が上がるのは当然のことであるので、この調査だけを元にして、行事の可否を決めるのは早計と思える。教育効果等も念頭に入れて総合的な判断が必要であろう。」とされ、H22年度に本実習の見直しを行うことが教務委員会で決定された。これまで実習を推進してきた体育教員としては、どのような経緯で何を見直すのか、全く把握できていない。また、アンケートや調査以外の方法で、教育効果を総合的に判断する「ものさし」をつくることは容易ではないし、それをもとに評価すること、および教育のどのような側面で効果的なのかを判断することには、多大な労力が必要であり方法的にも難しい。

学生の人間性を高めることや近年の本校の教育課題解決策としては、このような労力よりも学生と直接向かい合うこと、教育実践に力を注ぐことがより近道に

なるのではないだろうか。この年代の子供にとって、教室の授業のみで人間性が高まることを支持する教員はほとんどいないと思われる。この実習は教育実践そのものであり、担任にとっては、学生をよく知り捉える絶好の機会でもある。

以上のことから本実習は、準備、遂行、そしてアンケート調査等の事後処理などに関係教職員の労力を必要とするが、地理的好条件を有効に生かせる実習であり、単にスポーツ技能の向上のみならず、厳しい自然の理解、自らを律し予定どおり行動する強い意志、コミュニケーション能力や人間基礎力の養成に役立つ機会と考えられる。また、実習をとおして、悪条件の中でも逆境に耐える強い意志の養成や活動体力の向上など、逞しい学生を育てる機会の一つになっていることも事実と言えよう。

本実習の今後のあり方としては、本校の教育方針、目標および中期目標との整合性、行事なのか或いは教科体育の内容として扱うのかという位置づけの明確化、学生の実態、さらには毎回提出してきた学生の参加姿勢や実習に対する評価・意見なども十分に加味し判断することが必要であると考えられる。

5. まとめ

本報では、H11年度からH21年度までのスキー・スノーボード実習の概要と学生のアンケート結果を報告した。この期間の本実習は、H13年度からボードを選択できるように改善したものの、全体的な実習の実施日程、形態、費用などには大きな変化はなく、実施後の学生の満足度も高いことから、安定した実習に成長したと捉えることができる。

本校でこの実習が40年以上継続してきたことは、学校発足当初からの高い教育理念と関係者の努力の賜物であり、この実習の意義と教育的効果が認識されてのことと思われる。実習を推進する側としてこれらのことに常に敬意を表すとともに、学生のために継続・発展させる責任も感じている。

参考文献

- 1) 長野高専三十年史編集委員会：長野高専三十年史 pp372-396, 1993
- 2) 塚田修三・内山了治・児玉英樹：平成5年度から10年度のスキー実習報告, 長野工業高等専門学校紀要 第33号, pp169-174(1999. 12)
- 3) 長野工業高等専門学校第2期中期目標・計画書(平成21年度～平成25年度), p25(2009. 7)
- 4) 教務委員会資料, No. 12, H22年3月12日(2010. 3)